

諏訪地域の森林と災害

明治期

上智大学地球環境学研究所 若林洋平
森林景観の歴史の変遷と形成要因について
～ 明治期の長野県諏訪地域を中心に～ より

製糸業の発展と山林の荒廃

明治期の諏訪地域における製糸業の発展は、自然に負荷を与えた。特に製糸釜の燃料として、また工場・家屋等の建築材等として樹木を伐採したことにより山林荒廃が急激に進行した。（『天竜川流域調査書』による）



近代期には、諏訪地域で毎年のように水害が発生していた。（堀江三五郎『諏訪湖氾濫三百年史』）
特に、明治31年（1898年）9月の通称「横押しの水害」は、諏訪地域のほぼ全域に甚大な被害をもたらした。

諏訪地域の森林面積

現在 平成14年度（2002年度）

50,897ha 森林面積割合 71.1%

（平成18年4月1日現在 51,029ha 71.3%）



明治中期 明治17年～21年（1884年～1888年）

38,401ha～41,712ha（53.7%～58.3%）

明治後期 明治36年～40年（1903年～1907年）

（明治後半 大工場により製糸業が発展）

32,476ha～37,939ha（45.4%～53.0%）

天竜川流域の対策方針（諏訪湖周辺）

天竜川流域の河川改修計画は、明治18年（1885年）に内務省四等技師の沖野忠雄が作成

「山林によって水源を涵養しなければ、川を治めることは難しい」と結論付けている。



明治の人は、治山中心による河川整備方針を打ち出した。